



TITLE:

唐代における青海・ラサ間の道程

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. 唐代における青海・ラサ間の道程. 東洋史研究 1975, 34(1): 1-23

ISSUE DATE:

1975-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153574>

RIGHT:

東洋史研究

第三十四卷 第一号 昭和五十年六月 発行

唐代における青海・ラサ間の道程

佐 藤 長

唐帝國の最大の敵は吐蕃であり、長期に渡って兩國は和平と戦争を通じて、種々の形の交渉を持った。従って兩國の使節は頻繁に長安とラサ地方の間を往來したが、そのルートが何處を通ったかという点、必ずしも明確にはされていないのである。これに關して最も有名なのは、八二二年ラサ近郊で行われた兩國の會盟に派遣された劉元鼎の紀行であるが、それも中國文獻では、河州から青海の東南邊までと、ツェンポの牙帳近邊の地名だけで、青海の畔から牙帳までの間は、黃河の源に關する記事以外は空白で、何等のルートも示されていない。唯一つ残された重要な旅程は、新唐書卷四〇地理志・鄯州鄯城縣の條に註の形で述べられているものであるが、これは鄯城（西寧市）からラサ近郊までの全旅程を詳しく記している。しかしその地名には難解なものが多く、一二の例外的な研究を除いて、何人もこのルートを地圖の上に設定したものはない。^①ここにそれを試みるのは、當時のルートを正確に現代の地圖の上に再現し、唐・チベット交渉史或は唐代の歴史地理の上に少しく寄與することを念願するからに他ならない。

そこで、ここに用いる基本的な地圖・文獻を二三擧げておきたい。一般にこのような場合用いられる地圖は、Sarat

Chandra Das の地圖であるが、ここではそれとそれを一層詳細にしたホルディッチ Sir Thomas Holdich の地圖を用い、一部クラブポート Heinrich Klapproth の地圖を参照する。

文獻で特に参考にしたのは、玉樹稿十卷並に附録一卷であるが、これは玉樹縣に關する地方志である。唯この書は「稿」であるためか、序文が全く付いていず、従つてその著者は不明となっている。しかしそれは別書 玉樹縣調查記一卷の著者、天水の人周希武と見てまちがいない。^③ その附録は、周氏が一九一四年十月八日に、玉樹縣事情調査のため、泉蘭縣（蘭州）を出發して、湟源縣を通り、ジャリンノール Jaring nor へ Skya reñs nayur の近傍を経て、同年十一月二十六日にジェクンド Jekundo へ Skye rgu mdo に至つた旅行記であり、恐らくそのときの調査によつてこの縣志が書かれたものと思われる。旅行記の内容は豊富で、特に地名と里程を詳しく記しており、参照すべき記述が少くない。實はこの書に記された旅程は、少くともムルイウス河 Murui usu までは、唐代のそれと殆ど一致しており、この書の参照によつて、唐代のチベットルートを明かにすることができるのである。この書は從來何人によつても利用されたことがないので、特にこのことを注意しておきたい。なおムルイウスより西へのルートは、他に参照すべきものがなく、地圖だけに頼つてルートを辿つてゆくであらう。

又チベット文獻では、第三代パンチェンラマの傳記の一部 (B3PC) を利用した。第三代パンチェンは乾隆帝の古稀の祝賀式に參列するため、一七八〇年七月到北京に到着したが、タシルンポ Bkra gis lhun po を出發してからの道程が、彼の傳記の中に記録されている。それは大體において當時の官道に沿うものであるが、時に唐代のルートと重なるものがあり、頗る参考になる。

さて新唐書地理志の旅程は、驛によつて文章が區切られているので、それらに番號を附して引用するが、ここでは便宜上、鄯州・石堡城間は別稿に譲り、^④ 石堡城・ラサ近郊間を取扱いたい。

(一) 有定戎城、又南隔湖七里有天威軍、軍故石堡城、開元十七年置、初曰振武軍、二十九年沒吐蕃、天寶八載克之更名、又西二十里至赤嶺、其西吐蕃、有開元中分界碑。

周氏は東科寺 *↳ Stoñ skor dgon pa* の南三十五里の地にある哈拉庫圖城^④ *↳ Qara kütül* について次のように言う(玉樹稿二六七頁)。

葇水の東西二源からの小河が〔哈拉庫圖城〕城の北で合し、城はその西南山麓にあり、形勢は頗る險である。西は日月山まで二十里あり、蒙古族、チベット族が入ってくる大道を抑えている……城の東南の丘の上に古い城塞の遺跡があり、川を隔てて東北の山城にもまた古い時代の軍馬養育所がある。附近の崇淑には科瓣臺がある。

周氏はこの二つの遺跡について、通鑑開元十七年、信安王緯の石堡城占領の條の胡注を参照し、南東の丘の上のものを石堡城と見、北東の山の上の科瓣臺を定戎城の跡と見ている(玉樹稿二六七頁)。胡注は定戎城、石堡城については、(一)の文と同じことを言っているのであるから、周氏の石堡城の位置比定は動かないものと見てよい。また崇淑 *ch'ung shu* は *Rdsoñ gñl* (廢城趾) で、科瓣 *k'o pan* は *Mkhar spañs* (棄てられた城) と考えられるから、周氏がこれを定戎城の跡としたのは(玉樹稿二六八頁)、まず問題ないものとせねばならぬ。

周氏は更に、この地より西方日月山までは約二十里であるが、山は皆赤色で、これがまさに赤嶺であろうと言う(前掲書)。そして山頂より以東は農耕社會で、村の並木道が續いて絶えず、山の以西は遊牧社會で、荒野が廣く續き、時に牛羊の群が見える、故に唐蕃の境界碑は今はないけれど、ここが漢蕃の境界をなすことの來源は久しいものがあると言う(玉樹稿二七〇頁)。これによって赤嶺とは日月山の或る嶺を指すことは明かである。因に赤嶺に境界碑が建てられた年次は、開元二十一年(七三三)、或は同二十二年(七三四)である(古代史上四六頁)。

(二) 自振武經尉遲川・苦拔海・王孝傑米欄^⑤、九十里至莫離驛。

周氏は赤嶺を下って南西行し、黑城子を経て、その南東の阿什漢城に至っている(玉樹稿二七〇頁)。その側を流れる阿

什漢水を土地の人は倒淌河と呼んでいるが、これはその河の上流に當り、東流しており、山中で一回轉して更に下流が西へ向いルートの上に再び現れてくるから倒淌河と言うのだと言う（前掲書）。尉遲川の尉遲 *nat di* は恐らくこの阿什漢と同源の言葉であらう。

周氏は阿什漢城から二十里で、今度は西方に流れる倒淌河の下流に出、察罕城へ *Cayan gola* に到着している。その河岸が水草豊かで牛糞が多いので、ここにキャンプして一夜を過している。ここが苦拔海^⑥、苦拔 *k'uo b'at tɕ köbegü* (n)（岸邊）を寫しており、海は平野を表した言葉である。

周氏は更に進んで一〇里餘で瓦爾竈山に到着するが、これがダス、ホルディッチにあるバレンク峠 *Balekun Pass* であらう。語頭の *wa* は *ba* 音のآمد方言的發音と考えられるから問題はない。莫離驛はこの附近にあったはずで、莫離 **bak li* は *Bale* を寫した言葉に違いない。周氏の道程を計算すると、カラコトルからチャガン城まで七〇里、それにバレンク峠まで一〇數里であるから合計八〇餘里で、本文の振武軍石堡城から莫離驛までの距離九〇里はここに完全に一致する。

唯、王孝傑木柵の所在は明かにできない。楊應琚は、「木柵は尉遲川の西にある」と言うが（西寧志卷七、六丁裏）、恐らくは本文によって、そう言っているだけであらう。

(三) 又經公主佛堂・大非川、二百八十里至那錄驛、吐渾界也。

公主佛堂の所在は不明である。松田氏はこれを、「蓋し吐谷渾に降嫁した公主の造營に係はる佛寺の意であらう」とし吐谷渾の首都であった伏俟城附近にあったと認め、その城を青海の西岸に近かったとされるが（遺使考上六六頁）、吐谷渾に降嫁した公主にのみ關係づけられるかどうかは疑わしい。楊氏はこの佛堂を、「大非川の東にある」と言っているが（西寧志卷七、七丁表）、やはり本文によって漠然とそう言っているだけであらう。大非川そのものについても、「王孝傑木柵の西にあり、吐谷渾の國境に臨んでいる」と言っているからである（前掲書卷四、一六丁裏）。

問題なのは大非川で、唐代前期には、唐・吐蕃の戦は屢々ここで行われた。シャヴァンヌ Edouard Chavannes は、通鑑輯覽(卷五二、一八丁表)に大非川についての註に、「大非川は青海の西にあって、今の布喀川 Buga (yin) yool である」とあるのを紹介している。^⑧張穆も通鑑輯覽に據ったのか、やはりこれをブハ川に比定している。^⑨通鑑輯覽、張穆共に兩唐書吐蕃傳の開元十五年正月の條に、「王君奐が青海の西の大非川の近傍で悉諾羅 Sags sgra の軍を破った」と言う記事によって、大非川をブハ川と認定したのであろう。しかし當時の「青海の西」と言うのは、我々の考える西方ではなくて、青海が、東南に入江のごとく出ている突端から西、すなわち湖の南岸を言っていることは明かで、さればこそ通鑑考異は十道圖によって、「大非川は青海の南にある」と言っているのである(通鑑卷一九四、一〇丁裏、胡注)。大非川が何處にあるかは困難な問題であるが、實は極めて普通の史料からこの問題は解決される。すなわち嘉慶重修大清一統志(卷五四六、三丁裏)に、鹽池の説明として、

鹽池は青海の西南にあり、周圍は一〇〇餘里、青鹽を産する。西拉庫特兒山の莫和爾布拉克地の插漢烏蘇河が西から流れて來、集つてこの湖となつてゐる。また巴爾虎河・柴集河を合せて、名づけて鹽河と言ひ、東南に流れて功額池に入る。

という。内府輿圖九排西二を参照すると、鹽池は有名なダブスノール Dabusu nayur であるが、莫和爾布拉克はブハ川の南岸の墨和爾布拉克 Murgur bulay であろう。その所在地の西拉庫特兒山は、その川の北方にある庫德里阿林(内府輿圖九排西二)或は科得里山(新輿圖)で、Kötül ayula であろう。插漢烏蘇河は Cayan usu で、大抵の地圖にはムフルブラックから出る小河が明かにダブスノールに注いでゐるから、これがそれで、その河口に匝哈烏蘇、又は茶卡がある。この湖の東邊から河が流れ出、巴爾虎河 Balqu yool、柴集河 Cayiji yool を合せて東流して功額池 Gunga (Kun dgañ) nayur に入る。それが鹽河と名づけられてゐるのは、ダブス河 Dabusu yool の意譯から來ているにちがいない。とすれば大非 d'ai pī'wēi は音の上で Dabusu と完全に一致する。ダス、ホルディッチでは Hoyuyun River、中國地圖

では惠渠とあるのがこの河である。

これに關聯した山名として、兩唐書吐蕃傳には、大非山・大非嶺などが見えるが、それらもこの川の近邊にあったものと考えられる。胡氏は「鄯城縣（西寧市）から西行三〇〇餘里で大非川に至る」と言うが（通鑑卷二〇一、一八丁裏、周氏の道程で、西寧からチャブチャル *Chabiyal* まで三五〇里あり、その先にダブス河があることになるので、胡氏の言う三〇〇餘里は略々まちがいないものと見てよい。

さて引續いて那錄驛であるが、これは周氏の言う切吉河腦であらう。同氏はこれを、ヨーロッパ地圖に記載される和屯布拉克 *Andon bulak* に比定し、水草牛糞が皆適度に存在することを言っている（玉樹稿二九一頁）。ここはその名から考えて、當然湖があったはずで、那錄 *na li'ok* は *na'ur* を寫したものと考えられる。瓦爾森山より計算すれば二六〇里餘となり、本文の二八〇里に一致する。周氏はこれから險峻な山を越え、大河壩水の流域に出るが（玉樹稿二九一頁）、本文では那錄驛が吐渾の國境であると言うから、この山あたりまでが吐谷渾の領域であつたのであらう。ここより七〇里行くと班禪玉池があり（玉樹稿二九二頁）、また四〇里で扎梭拉溝 *Andza sa la chu* があつて絶好の野營地であるが（玉樹稿二九六頁）、距離が一致しなくなるので、切吉河腦を那錄驛と見なしておく。

（四） 又經暖泉・烈謨海、四百四十里渡黃河。

周氏は扎梭拉山から九〇里で欽科奢馬に至るが、ここには溫泉が若干あり、水が盛に湧いて川となつて流れていると言ふ（玉樹稿三〇〇頁）。欽科奢馬 *chin k'o she ma* は、譯せば「泉が多い」の意と言うから（前掲書）、*Chu ngo phyug ma* であらう。*chu ngo* の音はフムド方言では *tingo* であり、*phyu* の音は、同方言で *su* であるからである。暖泉は明かにこの *Chu ngo phyug ma* の地である。

烈謨海は、楊氏の述べる西寧・ラサ間の道程で、黃河より七〇里手前の所にある阿隆阿他拉 *Androngto tala?*（西寧志卷二一、二二丁裏）を指していると思われる。その説明に、「藥草がある」と言っているから、それは多分、興奮劑の一種

として用いられるリモ *Hbr mog* を指しているであろう。烈謨 *liät māk* はこの語に完全に一致する。

周氏の黄河に到達した地點は、オリンノール *Oring nor* *Sho rehs nayur* より二〇〇里ほど東方に離れた所と言うが（玉樹稿三一一頁）、やはり本文の黄河渡渉點もそのあたりであると思われる。勿論それより西方の河源と言われるオドンタラ *Odun tala* を通る道もあるが、本文でそれに何等觸れていないのは、やはりこの道がジャリンノールの東方を通ったことを示している。ホトンブラクから黄河までは、周氏の計算では四五〇里であり、本文の四四〇里と大體において一致する。

（五）又四百七十里至衆龍驛、又渡西月河、二百一十里至多彌國西界。

周氏は黄河から西南に向い、バヤンカラ山 *Bayan qara ayula* を越して、三四〇里の永沙族（ニンシエフ、*Yingsiyebü*）の所に温泉があることを言っているが（玉樹稿三三二頁）、これが衆龍驛であろう。衆龍 *tšjung li'ong* は *Chu dron*（暖水）の音譯と考えられる。ニンシエブ族は、西方は薩格拉吉山を隔てて娘磋族（ニャムツォ *Na misho*）と接している（玉樹稿三三一頁）。薩格拉吉山 *sa ko la chi* は *Sa dkar rse* で、その山の西側にあるのがセカル寺 *Sikar gumpa*（ホルディッチ）*Gser dkar dgon pa* であろう。而してこのセカル寺の側を流れるチエチ *Chie chu*（ホルディッチ）がサカルチ *Sa dkar chu* で西月河であろう。西月 *siei ngi'ar* は *Sa dkar* の音譯に相違ない。従って今まで南西行したルートは、衆龍驛から正西に向うこととなる。恐らくこのニャムツォ族のいる所が多彌國の西の境界になるのであろう。

なお周氏はニンシエブ族の所から南下してジェクンドに至るので、我々はここで同氏と別れて西進しなければならぬ。

多彌と言う種族は、吐蕃からは難磨と呼ばれていたと言うが、難磨 *nān bā* は *Nam pa* であろう。ケーパーガトン *Mkhas pañi dgañ ston, ja* には、吐蕃に必需品を供給する四人の王の名を擧げているが、それは、

Nam pa lde rgyal

Bal po li rgyal (金屬の王)

Sum pa lcags rgyal (鐵の王)

Mon rtse rgyal (樂器の王)

で、何れも吐蕃に服屬した種族であり、Nam pa も例外でないとすれば、これこそ難磨に當るものであろう。唯その王が Ide rgyal と呼ばれる理由は明かでない。Ide の意味は難解であるが、トゥッチ氏 Giuseppe Tucci はこれを「裝飾品」ornament と考えるのが適當であるとしており、これに従いたい。多彌はムルイウスの流域に住し、沙金を多く産し(新唐書西域傳二)、その故にこの河は中國では金沙江(揚子江上流)と呼ばれる程である。この沙金が裝飾品或はその材料として吐蕃に貢されていたが故に、その王は「裝飾品の王」と稱されるようになったのであろう。

(六) 又經犂牛河、度藤橋、百里至列驛、又經食堂吐蕃村・截支橋、兩石南北相當、又經截支川、四百四十里至婆驛。

犂牛河はリチュ Hbri chu で、ムルイウスまたは現代地圖のディチュ Di chu であって問題はない。藤橋はそこに架けてある藤類で作った橋であらう。列驛は明かでないが、リチュの近くであるから、列驛は Hbri を寫したものと思われる。^⑧

食堂はダス・ホルディッチに Djou dung とある所であり、スタン氏 Rolf Stein は、チベット文獻に出る Zo than, Co than と一致するとしているが、^⑨正しいであらう。第三代バンチェンの道程では、玉樹地方 G-yu cui 通過のとき、表敬訪問した僧に、ジョダン寺 Jog stan dgon pa のラマがあり (BSPC, p. 80b)、これも食堂 d'z'jak d'ang に一致するので、同一地點と考えられる。周氏の報告によれば、玉樹族の地にある黃帽の寺院として、二八〇人のラマを擁する覺讓寺 chiao jang su と言うのがあり(玉樹稿一七頁)、これがその地にある寺院であらう。それがわざわざ吐蕃村と斷つてあるのは、ここがルートの上で初めての吐蕃人の村落であることを示している。すなわちリチュまでは多彌族の地で、ここに至って初めて吐蕃人の境域に入るのである。

截支橋は截支河に架けられた橋であり、截支 *dziet tšie* はゼチュ *Dze chu* (ホルディッチ) を寫したものであろう。ルートはジョダンから南南西に向い、ゼチュの上流を横切るものである。ゼチュは玉樹稿の地圖では子曲 *zū chū* と出てくるものである。「兩石南北相當」とは、兩岸に大岩があり、相せまっていることを言うのであろう。婆驛については、次項で説明する。

(七) 乃度大月河羅橋、經潭池・魚池、五百三十里至悉諾羅驛。

大月河はダスに *Gergu River* と出てくるもので、ホルディッチのザチ *Rdsa chu* を指している。この河は、この邊では最も大きい河なので、大と言う形容詞が付けられたのであろう。玉樹稿の地圖によれば、河は格吉族の住牧地を通っており、格吉 *ko chi* はザムリンギ *ᠬᠤᠰᠢᠨ ᠭᠢᠨ ᠷᠢᠶᠠᠰ ᠪᠠᠳ* に出づるゲルツ *Dge rtse* と考えられるから (DLGS, p. 103) *Gergu* は *Dge rtse* が正確な綴字であり、發音は *getse, getse* で、*ngi^{wa}* はこの音を寫したものであろう。羅橋は藤を網のように結んで作った吊橋であらう。

ところでこのザチュの南側には、瓦里拉と呼ばれる小山脈が横わっている (玉樹稿地圖)。瓦里拉は恐らく *Brag la* で、ホルディッチの *Barak la* であり、*ba* が *wa* に變化するのは、アムド方言によるものであろう。しかし驛名の婆 *bua* はこの *Brag* の別音 *bā* とは關係なく羅橋すなわち藤橋 *Sha zann* の *Sha* から來たものであろう。この驛がザチュのすぐ東側にあったことは、本文に、「至婆驛、乃度大月河」とあることから推定され、それはダス・ホルディッチの *Dzi^{na} Dasi gompā < Bkra gis dgon pa* のあたりであらう。

ここから道はザチュの南岸を西方に辿り、潭池・魚池を通るが、これらの池のチベット名は分らない。ただダスには *Dunbula* の南邊、ザチュの北側に一つの小湖が見え、扎生吉尔湖 *cha sheng chi erh hu* (新輿圖) がそれだとする。 *Jiyasun jüil nayur* (魚類湖) と考えられる。内府輿圖十排西三に扎新齊爾舍里 *cha hsin chi erh shé li* とあるのは *Jiyasun jüil sirig^{ya}* 「魚類 (湖) のある草地」の意であらう。

悉諾羅驛は頗る難解であるが、多分ドンブラの西方にあるドロンドクル Dolon dakur (ダス・ホルディッチ) と考えられる。悉諾羅 *siet d'ak lá* は唐代文獻に人名として屢々現れ、*Siag sgra* が當てられるが、*st'ag la* とも考えられる。*dakur* は *ᠳᠠᠴᠤᠷ*、*st'ag sgra* 又は *siag la* の蒙古語的訛音であろう。清代の道程ではこの地點は托攸六托洛海 (西寧志卷二)、又は土平魯托洛海 (衛藏圖識卷下・新輿圖) とあるもので、タクトロガイ **Takra toloyai* が多分、正しい形と見なされる。それではドロンドとは何かであるが、恐らくこれは、清代の次の驛のドロンドクル *Doloyan bayatur* と混同したためと思われる。この地點は、内府輿圖・新輿圖などでは、みな多倫巴圖爾なる名を與えられており、土平魯托洛海とは全く別の地點である。しかしタクトロガイとドロンドクルとは近接地であるから、ダス・ホルディッチともに誤って一地となしたのであらう。兩者ともにドロンドクルの地名を出していないのはそのためと思われる。タクトロガイは清代の官道上の一點であり、唐代のルートはここでチベット高原に上り、清代の官道に一致して、暫くの間、西進することになる。

なお本文では婆驛から悉諾羅驛までの道は五三〇里あると言う。しかしダス・ホルディッチでは、以前の道の長さと比較して、長く見て三五〇里程度で、如何にしても五三〇里あるとは思えない。或は五三〇里は三五〇里の誤ではないかとも考えられるが、實はこの間の道は、地圖の上で考えられるような容易な道ではないのである。デュトレイユード・ラン Dutreil de Rhins は一八九四年四月八日に、タクトロガイの正南のザナルムク峠 *Dzanag lung mug Pass* (ダス・ホルディッチでは *Dzang lung mug Pass*) を出發し、ザチーの上流ザンチー *Dzang chu* に沿って、同月十六日にタシゴンバに着いている。^⑨ この間八日を費したのであり、それより少しく長いタクトロガイとタシゴンバの間は一〇日はかっているであらう。況してこの邊はザナルムク峠の海拔五二六〇メートルから考えると、それはルートの上での最高の地であり、その通過に肉體的に非常に困難を伴う地帯である。唐代における旅程については、大唐六典卷三に、

陸を旅行するには、馬では日に七〇里、歩行および驢では五〇里である。

とあり、周氏の旅行でも、一日に四〇—七〇里であることを参考にすると、道の悪條件を考え合せて、一日五〇里とすれば、一〇日で五〇〇里である。従って、この間が、本文で五三〇里と記しているのは、ほぼ一致し、誤った里数とは考えられない。

(八) 又經乞量寧水橋、又經大速水橋、三百二十里至鵠莽驛、唐使入蕃、公主每使人迎勞于此。

悉諾羅驛を過ぎて、最初の河は克蘭ネ河 *Qulan-ai yool* であり、これが乞量寧水であろう。ホルディッチによれば、タクトロガイの北にサインクダクン *Sain kudakun*、Sayin qudduy-un nayur なる湖があり、そこから克蘭河 *Kulan River* が流れ出、下流でイエヘアクダムに注いでいる。それで乞量寧水 *k'iet liang nieng* は *Qulan-ai yool* (野驢の川) を寫したものであろう。新興圖には烏藍水と書いているが、それは音の類似から *Ulan yool* と誤解されているのである。現在この地帯は、清中期以後、ゲルツェ族の遊牧地となつてゐることが確認されるが(西寧志卷二一、二三丁裏)、それにしても、唐代にこの邊にまで蒙古語名があつたのは、或は吐谷渾の支配の影響かもしれない。

克蘭河からイエヘアクダム河 *Yeke ag hdam chu* を横切り南西に進み、ダンラ山脈 *Gdan la* (當拉) を越して、大速水に達するが、大は形容詞で、速水がソグチ *Sog chu* を寫し、*Sog chu* (ホルディッチ)、*Suk chu* (ダス) であることは明かである。續いて鵠莽驛に到達するが、この驛については次項に述べる。

(九) 又經鵠莽峽十餘里、兩山相峩^{そはち}、上有小橋、三瀑布注如瀉^{はたぎ}、其下如煙霧、百里至野馬驛。

鵠莽驛は鵠莽峽の側にあつたと思われるが、それは多分内府輿圖十排西三の巴延噶爾穆、ダスのバインガルモ *Bain gar mo* で、正確な綴字は *Bayan dkar mo* と考えられる。唯、内府輿圖ではここを通る河はシャグチ *Çag chu* の支流であり、ダスではソグチュの支流である。今はダスに従つておく。鵠莽 *yuet mǎng* はこの *dkar mo* を寫した言葉であらう。冊府(卷九六一、一七丁表)には、鵠莽山を紹介して、「山の西八里に、三峽のごとき所があり、大瀑布があつて、雷のような瀑音が聞える」と言い、更に、「その山は遠くから見ると、色が黄色で白い」と言っているから、この場合の

鵲莽が *dkar mo* (白色) であることはまちがいない。鵲莽峽もこの山名から来たものに相違ない。ここより少しく南を流れる河はシヨグチ *Shog chu* (ホルディッチ) で、*Yag chu* が正しい綴字である (同文志二一六七頁では *Shog chu*)。この河をクラップロート *Klaproth* は *Boukchak*、その上流を *Bouk* と呼んでいるが (ホルディッチ八六頁地圖)、内府輿圖は確にこの上流を博克必拉 *po k'o bira* と名づけている。博克は *Hbog* であるが *Boukchak* は *Hbog Yag* であろう。この地は、一七二〇年に清の大軍が第七代ダライラマを奉じてラサに進軍したとき、この邊を中心にジュンガル軍が略奪を働いていたと言うから、やはり重要地帯であったと見なされる。公主が唐の使者を迎えさせたと言うのも、つまりはそのような重要地帯であったからであらう。

野馬驛の野馬 *ziwo ma* は、ダス・ホルディッチのジャマ (*Rgya ma*) に一致し、この地で現在は、北方から来る隊商路が合流し、道は南下する。

(二〇) 經吐蕃壘田、又經樂橋湯、四百里至閭川驛。

樂橋湯は、多分内府輿圖十排西三の租隆交である。租隆交 *tsu lung chiao* は *Mtsho lon kyog* (腸のうとく曲りくねった湖) (同文志二二二頁) で、その沿岸にあるのが樂橋湯 *lak g'ia'u t'ang* *Lon kyog than* であろう。従ってジャマからここまでのうち、ナチュカ *Nag chu kha* までは清代の官道と同一で、ナチュカからは少しく官道を西へそれることになる。

閭川驛は、チュガルモ *Chu dkar mo* *楚喀爾穆* (内府輿圖十排西三) の側と考えられるが、道は既に官道から離れているので、現在のチュガルモより少しく西寄りの地點であったであらう。閭 *t'ap* または *k'ap* は明かに *dkar (mo)* を寫している。

(二一) 又經忍謹海、百三十里至蛤不爛驛、旁有三羅骨山、積雪不消。

忍謹海は不明であるが、内府輿圖十排西三の沙巴克拉爾あたりであらうか。

蛤不爛驛は、岳克珠噶爾都（内府輿圖十排西三）、岳克珠噶爾多克塔拉（新輿圖）であろう。岳克珠 *yo k'o chu* は、第三代バンチェンの渡った *Dbyug chu* で（BSPC, p. 71 b）、噶爾都 *ka êrh tu*、噶爾多克 *ka êrh to k'o* は *sgar hbrog* と還元され、夏の遊牧地を意味する。塔拉 *t'ala* は言うまでもなく *tala* である。蛤不爛 *kâp piau lan* は *ŋ Sgar hbrog* を寫した文字に違いない。

三羅骨山は、恐らく三骨羅 *sam kuat la* が正しく、*Bsam grub* を寫したものであろう。この山は、中國の現代地圖では、ルートの西側に存在する薩穆坦岡雜山（内府輿圖十排西三・新輿圖）と同一で、*Bsam glan gans ri*（同文志二一六四頁）がこれに一致する。とすると岡雜は岡離の誤りのようにも見えるが、ダス・ホルディッチともに *Sanden kansa Pk* なる名稱を出しているので、誤りとばかりは決定できない。また *Bsam grub (tse)* と言う名は、新輿圖ではその山麓に双竹山口なる地名を置いているから、現在でも使われている名稱なのであろう。

唯、*Bsam grub tse (Dhyana-giri)* の名が唐代にあったとすると、當時既に、吐蕃に佛教寺院があったことになる。しかし本文（一四）では、ラサの近傍に佛堂と言う地名が出てくるから、あっても不自然ではない。同文志（二一六四頁）には、薩木丹は禪定の謂で、山には積雪が多い。昔番僧がここに禪定したのでこの名が付けられた。

と説明しているが、これは傳説ではなく、遙か吐蕃の時代の事實を傳えているのである。

（二二）又六十里至突錄濟驛、唐使至、贊普每遣使慰勞于此、又經柳谷莽布支莊、有溫湯、涌高二丈、氣如煙雲、可以熟米、又經湯羅葉遺山及贊普祭神所、二百五十里至農歌驛。

突錄濟驛は、地圖の上でも文獻の上でも見出せない地名であるが、唯、同文志（二一六九頁）にタルジ山 *Rtar dsiri*（達爾子里）なる山名が挙げられ、明かに突錄濟 *tuat li'ok tsei* に一致する。同文志には次のような説明が付けられている。チベット語で達爾子は牧馬の人の意である。傳説によれば、唐拉汗の牧人が神となり、曾てこの山に現れた。故にこのような名が付けられたのである。

唐拉汗はタンラカンリ山 *Than lha gans ri* の略で、テングリノール *Tengri nayur* の東南に横わるニエンチェンタンラカンリ山 *Ghan chen than lha gans ri* を指しているのであらう。汗 *han* は *khan* へ *qayan* の意にとれば、或はこの地方の支配者または神を指しているとも考えられるが、ここでは *gans ri* の略された形と解しておく。タルジ驛の位置は明かでないが、テングリノールの北邊に東西に横わる山脈があり、それを越す所にあつたと思われる。

柳谷莽布支莊は全く分らないが、莽布支 *mang pu tsie* は *man po rie* で支配者の稱號であるから、或はその莊園のあつた所であらう。位置はテングリノールの東邊の草原いわゆるダム *Hdam* にあつたであらう。

温湯は多分、西藏圖考(卷一、一五丁裏、一六丁表)に、達木遊牧(ダム草原)の南にある寧仲湯泉で、寧仲 *ning chung* は *Ghan chen* に相違なく、その温湯はニエンチェンタンラ山の麓にあつたのであらう。

湯羅葉遺山については、遺は遣の誤りと見れば、*tang la iap k'ian* でダムラニエルガンの峠 *Hdam la hal gan la* に一致する。この峠はテングリノールの北方地帯からその湖の東方を通つてラサへ通ずる道が、ニエンチェンタンラを越える所で、軍事的にも重要な峠である。ダス・ホルディッチではともに *Dam niyagan la* である。

農歌 *nuong ka* は、この峠を越してジヤンチュ *Jung chu* (ホルディッチ。チベット綴り不明)の流域に入つた所で、川の東側に少しく離れて存在するナルガジャ寺 *Nargadja Temple* (クラブプロット。チベット綴り不明)に相違ない。タルジ驛からナルガジャ驛まで二五〇里は地圖の上でも妥當である。

(一三) 邏些在東南、距農歌二百里、唐使至、吐蕃宰相每遣使迎候于此、又經鹽池・暖泉・江布靈河、百一十里渡姜濟河。

「ナルガジャからラサは東南二〇〇里」とあるが、嚴密に言えば、方向は南南東であり、最短距離でも二〇〇里以上はあつて、三〇〇里の誤りではないかと疑われる。鹽池・暖泉はともに不明である。

江布靈河も難解であるが、布靈河 *pu ling* とすれば、ナルガジャの南にバルンガン寺 *Ba lung gang Temple* があ

るので(クラブポート)、この所を流れていた河であろう。同文志(二二二頁)に、巴隆楚 Rba klön chu なる河名があり、「波 rba klön が多いからこのように名づけられた」と註されている。或はこの河ではないかと思われるが、疑を存しておく。それにしても江の意味は不明である。

姜濟河の姜濟 Kiang tsei はジュンチュ河 Jung chu で、そのトェルンチュ河 Stod lun chu (ヤンパチャンチュ Yans pa can chu)に流入する所でこの河を渡ったのであろう。従ってこれからはトェルンチュの南岸を東進することになる。

(一四) 經吐蕃墾田、二百六十里至卒歌驛、乃渡臧河、經佛堂、百八十里至勃令驛鴻臚館、至贊普牙帳、其西南拔布海。

卒歌 tsuat kâ は恐らくチュカ Chu kha (河口)で、トェルンチュがキチュ河 Skyid chu に流入する所であるから、現在のラチ Lha chu の近傍であろう(GHP. map. 1)。キチュはチベット文獻でもツァンポ Gtsân po と記され(GHP, p. 103, n. 94)。清代の文獻でも、「キチュはすなわち藏河である」と記したものがあから(西藏誌六二頁)、「藏河 tsang をキチュと見ることは一向差支えない。ジュンチュとトェルンチュの合流點からここまでの二六〇里と言うのも妥當と認められるのである。

佛堂の位置は分らない。

勃令驛はラサの近邊であつたはずであるが、これに當る地名は地圖の上では見當らない。唯フェラリ女史 Alfonsa Ferrari は、一四一九年のセラ寺 Se ra theg chen glin の建立に關して、ヴァイドゥーリアセルボ Vaidurya ser po を引いて、その學部 grwa tshan はヤラト Se ra stod' ヤラセ Se ra smad' キヤ Rgya' ロンテン Hbron sten の四つがあつたことを言い、またスンバケンボ Sum pa mkhan po がバクサムジョンサン Dpag bsam ljon bzän の中、彼の時代にはギャとロンテンはセラトエに合併されたと言っているのを紹介している(GHP, p. 100, n. 81)。セラもギャも何等宗教的な意味を持たない言葉であることから考えると、それらはもと地名であつたのであろうし、ロンテンも恐らく地名であつたであらう。とすれば、Hbron sten の意味は「接待する高臺」で、Hbron は勃令 buat liang に完全

に一致する。更に全體の意味からすればそれは鴻臚館そのものである。古代チベット王國の崩壊とともにこのロンテンも荒廢したのであろうが、その名はセラ寺の一學部の存在地として、一四一九年には再興し、一八世紀の前半にその名は消滅したのである。従つて勅令驛は現在のセラ寺の所にあつたものと考えて差支えない。セラはラサの北方二・五マイルの所にあり (GHP, p. 99, n. 81)、ツェンポが外來の客を迎え、宿泊せしめるのには最も適當な場所であつたのである。それにしてもチュカ驛からここまで一〇〇里ほどと思われるのに、一八〇里と言うのは少しく誇張があるように見える。

ツェンポの牙帳は、ここでは何等その位置が記されていないが、八二二年に唐・吐蕃の會盟が行われた場所は、「ラサの宮殿の東方のラトェ園 *Shra stod (shal)*」であつたから (古代史下九二五頁)、現在のラサまたはその近郊であつたと思われる。ツェンポの牙帳は常に移動していたが、ラサでは一定の所に所在していたのであろう。夏營地が、ラサの北東方のメルロ河 *Mal gro chu* の流域であつたことについては、前に述べておいた。

最後に拔布海の問題がある。これについては冊府 (卷九六、一七丁表) に、「その君長はあるときは跋布川に居り、あるときは邏些 (ラサ) に居る」とあり、新唐書吐蕃傳上 (二丁裏) に、「ツェンポは跋布川あるいは邏娑川に居る」とある跋 (跋) 布川と同一の地域であらう。本文ではラサの南西の地帯が跋布海だと言うから、それはキチュに沿つた平野を言っているに違いない。ところでホルディッチを見ると、ラチュより南のキチュの西岸にナムバプックラ *Numbapuk la* なる山名を記している。Nam は *Gnam ri* で (同文志二六九頁)、實はこの山の西側の山を指している。Bapuk la は西藏圖考 (一〇四頁) に、險要の地として擧げられている巴布賴長嶺と一致する。同書の附圖に、この山の裏側すなわちヤンパチェン *Yans pa can* 寄りに巴布賴なる地名があることが、その山の位置を確定するであらう。ただしこの際の賴 *lai* は *la* を寫したのではなく、*ci* を寫したものである。西藏圖考 (三三四頁) には、*Hbri Chu* を布賴楚 *pu lai chu* と寫しているのが、その例證である。而して Bapuk は多分 *h̄bah phug* で、*h̄bah* は「雄大」 (同文志一五五頁)、*phug* は「空濶の高原」 (同文志二〇二頁) の意味で、この山の廣大さからこのような名稱が起つたのであらう。跋布川 *b'uat puo*

は、*Hhah phug chu* を寫したもので、河名はその山の呼名から來たものと考えられる。拔布海 *b^w at puo xai* はその河の流れる平原を指したものであること勿論である。^⑨

新唐書の吐蕃傳の文章は拔布川とラサ川即ちキチュを別のものとして記しているごとく見えるが、實はそれは同一のものであったのである。恐らくは冊府の文章が元のもので、新唐書はこのラサをラサ川と解釋したのであろう。

以上で石堡城からラサ近郊までの道程を検討し終ったが、その結果は作成された二葉の地圖を参照されたい。地名についてはチベット語の原名が分らず、また位置の確定できないものも二三あるが、それらについては博雅の士の示教を待つより他はない。

ところでこのルートは清代のものとも、現代のものとも、かなり異ったところがある。清代には、西寧から黄河までの道は唐代のものと略々一致し、黄河を越えてからは、その北方の高原地帯を南西へと進む。而してタクトロガイでそれは再び一致し、ジャマを少しく南下した所でまた西方へ別れ、ジュンチュ・トェルンチュに沿って東に彎曲し、ラチュの所からキチュに沿って北東へと遡るのである。黄河からタクトロガイまでの道の相違はともかくとして、ジャマより西方へ大きく回ってラサへ入るのは、甚しい廻り道ではなからうか。清末民初にはジャマよりラサまでの道は殆ど正南に向っており、この間の最短のルートとなっている。何故唐代にはこの最短のルートをたどらなかつたのであろうか。今この疑問に明確な回答を出すことは困難であるが、近代の南下路は、實はその途中の山々に峻險な所が多く、また岩石の多い荒野が續くなど、歩行にかなり惡條件がそろっているらしい。峠なども、後世、岩山を切通して漸く通ずるようになった所があるらしい。唐代の道の状況からすれば、やはりジャマからニンチェンタンラ山脈の東側を通る迂回路を取るのが、最も良い方法だったのである。

それではこの新唐書地理志の旅程は唐代の何時頃のものであったのであろうか。これについては古くブッシュェル S. W.

Bushell が次のごとく述べてゐる。⁹⁾

この旅程が何時頃のものかについては何等記されるところはない。しかし含まれている事實からすれば、それは、赤嶺の境界碑が建てられた七三四年と金城公主が没した七四一年の間のものでなければならぬ。

興味ある見解であるが、境界碑の建立は開元二十一年（七三三）であり（四頁）開元二十六年（七三八）玄宗の命によって毀たれるまでは存在したから（兩唐書吐蕃傳上、一〇丁裏、通鑑同年六月辛丑の條）、本道程の原文は七三三—七三八年に作られたことが分る。また本文（一）には、開元二十九年（七四二）天寶八年（七四九）の石堡城關係の記事が入っており、これによれば開元二十九年以後の記事は後から書加えられたものとせねばなるまい。開元および天寶の初期は唐の帝國の黄金時代であり、吐蕃との間にはかなり激しい戰鬪が行われたが、使節の往來も亦多かったので、このような旅程が書き残されたのであろう。この旅程の最初の文が七三三—七三八年の間に作られたものとする、それから導かれる重要な事實は當時既に佛教がチベットで行われていたと言ふことである。サムルブツェと言ふ佛教に關係ある山名（本文一二）、或は佛堂と言ふ地名（本文一四）は、吐蕃における佛教が七三八年までにその基礎を置いていたことの重要史料となるであらう。

なお注意しておきたいことは、青海地方の地名に蒙古語で解釋できるものが若干あることである。吐蕃の時代の地名を蒙古語で解釋するのは、甚だ奇妙に思われるかもしれない。しかし吐蕃が青海地方を占領する前に、この地を支配していたのは吐谷渾であつた。そして吐蕃占領後も若干の吐谷渾は青海に残つていたのである。ペリオによれば、吐谷渾の支配民族は蒙古語に近い言葉話す人々であつたと言ふから、蒙古語を以て一應解釋できる地名があつたとしても不思議ではない。尤も現在でも青海・チベットには蒙古語の地名は少くない。否むしろ驚くほどそれらが多いのである。しかしそれらは一六世紀以降、青海地方に蒙古族が大量に移動し、そのうちのホショート族などは、チベットまで征服したほどであるから、彼等によつて蒙古語の地名が多く付けられたと見るべきであらう。それらは吐蕃の時代の吐谷渾語とはまた異つたものとしなければならないのである。

註

① ヨーロッパで最初にこの旅程を紹介したのはブッシュェル S. W. Bushell である。彼は舊唐書卷一九六上・下、吐蕃傳上・下の英譯 The Early History of Tibet from Chinese Sources, Journal of Royal Asiatic Society, 1880, p. 434-541 の中からの新唐書地理志の道程を翻譯し、附載しているが (ibid. p. 538) 地名の比定は殆ど行っていない。又ペリオ Paul Pelliot は兩唐書吐蕃傳の佛譯 Histoire ancienne du Tibet, Paris, 1961 の卷末に、この道程の譯を附しているが、これ亦地名の比定は極めて僅かである。日本では足立喜六氏が「唐代の泥波羅道」支那佛教史學第三卷第一號 (一九三九年) の中にこの文を引用し、地名比定をすべてにわたって行っているが、ルートはリチュ河 Hbrichu を横断して南下し、四川からのルートに合して、それより西進したとしている。従って地名の比定は、殆どすべてが誤っており、全く信用できない。また松田壽男氏は遺使考の中で、チベット高原の當時の少数民族の位置設定を行い、その材料にこの地理志の文を利用してゐる (遺使考上六五頁)。そのラサへの道いわゆる入吐蕃道は、ユック師 Father Régis Huc の旅程 ツアイダムーブルハンブダ山—黃河源—バヤンカラ山—ムルイウス河に一致するとしている (前掲論文六七頁)。しかしこれは私の考えるルートよりは西に寄り過ぎていて、別のルートである。

② 別稿「唐代青海東邊の諸城について」(未刊)において詳説の豫定である。

③ 前掲論文

④ 哈拉庫圖は Qara qota とも考えられるが、周氏は後に哈拉庫圖爾とも書いているので (玉樹稿二七一頁) Qara kōtūl を正しい寫しと見なす。ダス・ホルディッチではシャラクト Shalakuto とやれている地點がこれに一致するが、何故これをシャラクトと呼ぶのかは明かでない。

⑤ ブッシュェルは木柵を wooden palisade と譯しているから、木柵を正しいと見たのであろう。従うべきである。

⑥ 冊府卷九六一、一六丁表には、可跋海について次のような説明を行っている。

可跋海というのがある。赤嶺から百里あり、周圍は七百里である。水は苦くて飲むことができない。

即ちここでは可跋海は湖であり、しかもかなりな大きさである。周氏のルートに従い、赤嶺から一〇〇里の所を見ると巴顏淖爾 Bayan naur があり、そこは一大原で、細草があり、絶好の牧場であると言ふ (玉樹稿二七九頁)。とすれば苦跋海はバヤンノールとするのが適當なように見える。しかし赤嶺から一〇〇里では莫離驛を二〇里ほど越すことになる。赤嶺、莫離驛の間に苦跋海が置かれる限り、やはり本文のごとく、苦跋海は阿什漢水の畔に定めざるを得ない。ここでは暫く、本文の苦跋海と冊府の可跋海とは別の存在であったと理解しておきたい。勿論、可跋 k'a b'uat や可跋 köbögü を寫したものであることは疑いない。

⑦ Edouard Chavannes, Documents sur les T'ou-kiue (Turs) occidentaux, Petersbourg, 1903, p. 179, n. 1.

- ⑧ 張穆「蒙古游牧記」（國學基本叢書）卷一二、二八六頁。
- ⑨ George de Roerich, *Le parler de l'Amdo*, Rome, 1958, p. 118.
- ⑩ Sitar gumpa は、玉樹橋の附圖に色航寺 *sé hang ssu* とあるもので、黄帽派の寺院であり、周氏の調査では三四〇人のラマが住している、ニヤムツォ族地帯最大の寺院である（玉樹橋一八八頁）。ダスに *Niantso gumpa* とあるのもこれであろう。第三代バンチュンの道程で、*ニシナル G-yu gul*（玉樹）で謁見したラマに「セルカルチョェリン寺 *Gser dkar chos glin* から来たものがいるが（B3PC, p. 80a）」この寺名が正確な綴字であろう。
- ⑪ Giuseppe Tucci, *Preliminary Report on two Scientific Expeditions in Nepal*, Rome, 1956, p. 86.
- ⑫ *ibid.*, p. 86, n. 5.
- ⑬ 新唐書吐蕃傳下一五丁裏に、
黄河の源は、西方吐蕃の列館から約四驛の所にある。每驛は二百餘里である。
と言う文があるが、この列館も列驛と同一であろう。本文では黄河から列驛まで七八〇里であり、四驛間では八〇〇里で、ほぼ一致する。ここで「約四驛」と言うのは、距離を例えて言っているのので、驛がそこまで設置されていると言う意味ではある（註）。
- ⑭ Rolf A. Stein, *Les tribus anciennes des marches sino-tibétaines*, Paris, 1959, p. 81.
- ⑮ これが魚池だとすると、潭池の位置が問題になるが、潭池は
- この後に出てくるサインクダクンノールらしい。尤もそうすると、テキストの叙述の順序とは逆になる。
- ⑯ Graham Sandberg, *The Exploration of Tibet, its History and Particulars from 1623 to 1904*, Calcutta, 1904, p. 223.
- ⑰ Luciano Petech, *China and Tibet in the Early 18th Century*, Leiden, 1950, p. 61.
- ⑱ 佐藤長「吐蕃王の夏牙悶懼廬川について」古代文化二五卷二號。なおトッチ氏はオルカ *Hol ka*（ツタンノ東方）の近くにメルロ *Rmal gro* があつたことを言うが（Tucci, *op. cit.* p. 77, n. 1）私はこれを悶懼廬川とは考えない。また冊府卷九八一に、八二二年の唐蕃會盟の記事があり、それには劉元鼎が「磨谷に宿泊した」ことを言っている。この磨谷 *muā iwong* と *Mal gro* を寫したものとあろう。新唐書吐蕃傳下六丁裏では、彼は「磨谷に宿泊した」と言うが、*mal mīe* と *mal* を寫したものと考えられる。
- ⑲ 私は先に、拔布川を敦煌文書に出てくる *Bal po* と見、ネパールの國境に近いディンリチュ *Din richu* またはジャルウチ *Jaru chu* をそれに當てたが（古代史と卷七四三頁）それは全くの誤であるのだから訂正しておきたい。
- ⑳ Bushell, *op. cit.*, p. 540, n. 1.
- ㉑ Paul Pelliot, *Notes sur les T'ou-yü-houen et les Sou-p'i*, T'oung Pao, vol. XX, 1921.

略語表

玉樹稿＝周希武「玉樹縣志稿」臺北、一九六七年。

西藏誌＝焦應旂「西藏誌」臺北、一九六五年。

西寧志＝楊應琚「西寧府新志」

冊府＝「冊府元龜」

同文志＝「西域同文志」東洋文庫影印本、東京、一九六一年。

遣使考＝松田壽男「吐谷渾遣使考」上・下、史學雜誌第四八卷

一一號・一二號。

古代史＝佐藤長「古代チベット史研究」京都、上卷一九五八年

下卷一九五九年。

內府輿圖＝「乾隆內府輿圖」(清十三排圖)北京、一七七五年。

新輿圖＝「中國新輿圖」第二六圖、上海、一九一七年。

ダス＝Sarat Chandra Das, Journey to Lhasa and Central

Tibet, London, 1902. 附屬地圖。

ホルディッチ＝Sir Thomas Holdich, Tibet, the Mysterious,

London.

クニハントーラ＝Heinrich J. Klapproth, Map of Tibet from

Map of Central Asia, 1830, referred to in Holdich.

B3PC＝Biography of the Third Panchenlama: Rje bla ma

srid shi'i gtsug rgyan Paṇ chen thams cad mkhyen pa

Blo bzai dpal ldan ye ges dpal bzai poṭi sha sṅa nas

kyi rnam thar pa ṅi maṅi ḥod zer shes bya baṅi smad

cha, ka (Tōyō Bunko Cat. No. 116—1299 (2))

DLGS＝Turrel V. Wylie, The Geography of Tibet accor-

ding to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad, Rome, 1962.

GHP＝Alfonsa Ferrari, mk'yen rtsē's Guide to the Holy

Places of Central Tibet, Rome, 1958.

The Route from Koko nor to Lhasa in the Tang Period

Hisashi Satō

The route from Shan-cheng 鄯城 county (Xining 西寧) to the Tibetan capital at Lhasa is recorded in the geographical monograph of the *Xin Tang shu* 新唐書 (ch. 40), under the heading for Shan-cheng county, Shan-zhou 鄯州. As this itinerary was of considerable importance as the link between Tang China and Tibet it has in the past received a good deal of scholarly attention, but existing studies have not been successful. The author here attempts to reconstruct and map the Tang route, and finds that the route was (1) halfway identical with the Qing official route, and half quite different, (2) totally distinct from the caravan route of the nineteenth and twentieth centuries which crossed the southern rim of Tsaidam, and yet (3) the shortest route between Xining and Lhasa that could have been used during the Tang period.